

前期ドゥルーズ哲学における *esthétique* 概念について

内藤 慧

序

ジル・ドゥルーズの哲学、特にその美学思想に関する研究は既に彼の生前から続いており、没後 20 年を経た現在ある程度の蓄積がある⁽¹⁾。ドゥルーズにおいて明示的に芸術作品ないし作家、「芸術」概念が主題となるのはフェリックス・ガタリとの共著以降のテキストからであり、それらの研究もこの時期のテキストを主たる分析対象としている。しかし、ドゥルーズが共著以前の段階で既に芸術作品や作家に対して関心を持っていたことは、彼の前期著作に頻出する芸術作品を用いた例示や、カント批判の文脈において独自の *esthétique* 概念が提示されることから考えて、明らかである。*esthétique* という語は多義的な語であり、カント哲学への批判という文脈上、この語はまず「感性論」と訳され得ると考えられるが、ドゥルーズ自身はこの語に意識的に「美についての理論」つまり「美学」という意味を読み込んでいる⁽²⁾。そうであれば、われわれはドゥルーズの美学思想を考える上で、前期著作における *esthétique* 概念に対して目を向ける必要はないだろうか。

本稿では、ドゥルーズ独自の *esthétique* 概念の内実と位置付けとを明らかにすることを目指す。まず第 1 章では、ドゥルーズの *esthétique* 概念を明らかにすべく、主著『差異と反復』における *esthétique* 概念への言及を参照し、ドゥルーズがカント哲学をどのように批判し、そこからどのように *esthétique* を独自の概念として練り上げているのか、概観する。第 2 章では、ドゥルーズの議論を検討することを通して、*esthétique* 概念がどのような仕方で「感性論」と「美学」という意味を併せ持つに至るのか、確認する。以上の過程で本稿はドゥルーズのカント解釈を参照することになるが、そのテキスト読解上の正否は問わず、その論旨を明らかにし、帰結するドゥルーズの主張を抽出することのみを目指す。

1. 『差異と反復』における *esthétique*

『差異と反復』におけるドゥルーズのカント批判には複数の論点があるが、本稿では『純粹理性批判』「超越論的感性論」冒頭におけるバウムガルテンに対する批判に関するドゥルーズの言及を参照する。カントは感性を、対象から触発を受けることによって表象を得る能力、受容性と定義しつつ、そのア・プリオリな原理に関する学として超越論的感性論を提示する⁽³⁾。この際カントは、*aesthetica* という語によって「感性的認識の学」としての美学を考えていたバウムガルテンに関して、美の判定の経験的性格を指摘することを以って批判している。以下の引用はこのようなカントの議論を踏まえたものである。

われわれは表象作用を、それとは別の本性の形成作用と対置してきた。表象作用の基本的な諸概念は、可能的な経験の諸条件として定義される諸々のカテゴリーである。しかし、このようなカテゴリーは現実的なものに対しては、あまりに一般的で、緩すぎる。(…) だから *esthétique* が、現実的なものについて可能な経験に合致するものしか保持し得ない、感覚され得るものについての理論 *la théorie du sensible* という領域と、反射する限りでの現実的なものの現実性を、他方で受け入れる美についての理論 *la théorie du beau* という領域という、還元し得ない2つの領域に分裂しても驚くことはない。⁽⁴⁾

上の引用は『差異と反復』第1章からであるが、前半部はカント哲学に対するドゥルーズの批判であり、後半部はドゥルーズが批判するカント哲学から帰結する *esthétique* 概念に言及する。ここでのドゥルーズのカント批判の要点は、カント哲学において経験を基礎付けているカテゴリーが、現実の経験を基礎付けるには一般的過ぎる「可能的な経験の条件」でしかない、という点である。つまり、一般的な概念によって個別の経験を基礎付けることに対する批判である。引用部に示されていないが、表象作用としてドゥルーズが考えているのは、感性的直観に悟性概念が適用されるこ

とによって対象が同定され再認識されることであり⁽⁵⁾、第1批判においてカントが提示する思弁的な認識が念頭に置かれている。そして、このカント的な表象概念の帰結として、「感性的認識についての学」かつ「美学」であった *esthétique* は、認識において表象を受け取る能力についての「感性論」（感覚され得るものについての理論）へと一本化され、他方で「美学」（美についての理論）を「感性論」と区別して第3批判に割り当てたというのが、ドゥルーズのカント哲学に対する見立てである。*esthétique* が分裂した、というドゥルーズの言葉は、カントにおいて *Ästhetik* が認識における受容性の原理を扱う「感性論」に限定され、それとは別に「美学」が立てられたことを意味している。この際、「美学」の領域は、カント的「感性論」が担う可能的な経験に対する、現実性の次元を担保していると考え得る。以上のように要約されたカント哲学と、そこから帰結する *esthétique* 概念の意味上の分裂に対して、ドゥルーズは次のような議論を展開する。

だが、条件付けられるものより緩くなく、そしてそれらカテゴリーとは本性上異なっている、現実的な経験の諸条件をわれわれが規定するとき、事態は一変する。*esthétique* の2つの意味は混じり合い、感覚され得るものの存在が芸術作品の内
に開示され、同時に芸術作品が実験として現われるようになる。⁽⁶⁾

先の引用においてドゥルーズが問題としたのは、一般性を帯びた理論的認識を基礎付けている、可能的な経験の条件としてのカテゴリーであった。ここでドゥルーズはこれと対立する「現実的な経験の諸条件」を掲げ、さらにその帰結としてカントにおいて分裂した *esthétique* 概念の2つの意味が、混じり合うとする。ここから、まずドゥルーズ自身の哲学における *esthétique* 概念は、「感覚され得るものの存在」に関して言及する「感性論」であるとともに、「芸術作品」を扱う「美学」でもあるということがわかる。ここではまだ「現実的な経験の条件」とは何か、には踏み込まず、ドゥルーズの理解するカント的「感性論」に対して、ドゥルーズの考える「感性論」かつ「美学」としての *esthétique* 概念の内実を、以下のテキストの内に探してみたい。

感覚され得るものの中で表象されることのできるものに基づいて感性論を打ち立てることができたということは、奇妙なことである。(…) 感覚されることしかできないもの、感覚され得るものの存在そのもの、つまり差異、ポテンシャルという差異、質的に雑多なものの理由としての強度という差異、これらをわれわれが、感覚され得るもののなかで直接に把握するとき、経験論は超越論的になり、感性論は必自然的な学問の分野となる。(7)

ドゥルーズはここで2つの感性論を区別している。一方は「表象されることのできるものに基づいて」打ち立てられた感性論であり、他方が「強度という差異」「感覚されることしかできないもの」を直接に把握する場合の「感性論」である。表象されることができるとは、先の表象作用に対するドゥルーズの理解をもとに考えるならば、悟性概念が適用され得るということ、だと理解することができる(8)。つまりカント的「感性論」の対象とは、悟性概念が適用され得る限りでの感性的対象であるということになる。言い換えれば、概念によって把捉できるものだけが感じられるということになる。一方でドゥルーズは自身の感性論の対象を「感覚されることしかできないもの」としている。つまり、ドゥルーズの感性論の対象とは悟性によって把捉されず、逆に感性によってしか捉えることのできない対象、感性に独自の対象であるということになる。そうであれば、ドゥルーズは、認識の成立に際して感性的直観へと悟性概念を適用するカント的認識論ならびに「感性論」に対して、感性それ自体に独自の領域を認めている点で異なる「感性論」を提示していると考えられるだろう。

ここまでドゥルーズの *esthétique* 概念の独自性を、ドゥルーズが批判するカント的「感性論」との対比によって検討してきた。思弁的な認識に際して、悟性概念が適用され得るものを受け取る能力として感性を考えたとされるカント哲学において、ドゥルーズは本来多義的であった *esthétique* 概念が「感性論」と「美学」とに分裂してしまったと考える。これに対して、ドゥルーズは自身の哲学における *esthétique* は「感覚されることしかできないもの」を対象とすると規定しつつ、そこにおいて「感性論」と「美の理論」という異なる意味が混ざり合うとしている。

2. esthétique の分裂と再統合

それでは、なぜ可能的な経験の条件としてのカテゴリーを導入することが、esthétique 概念の意味上の分裂を招くことになるのだろうか。そして、それに換わる「現実的な経験の条件」を導入することによって、なぜ「感性論」と「美学」という2つの異なる部分が再統合されるに至るのか。まずは前者の問いに関してより明確である「プラトンとシミュラクル」というテキストから以下の部分を引用したい。

esthétique はそれを引き裂く二元性に苦しんでいる。それは一方で、可能的経験の形式としての感性の理論を、他方では現実の経験の反映としての芸術の理論を指示している。この2つの意味が再統合されるためには一般的な経験の諸条件が、現実的な経験の諸条件にならなければならないし、芸術作品の方では、それが実際に実験として現われなければならない⁽⁹⁾

基本的な論旨は『差異と反復』と異なっていないが、問題がより明確に提示されている。esthétique は一方では、経験の可能性を基礎付ける「感性」という形式に関する理論、つまり「感性論」という意味を指示し、他方では可能性ではなく、現実の経験を反映する芸術に関する理論、つまり「美学」という意味を指示している。このテキストは、なぜ可能的な経験の条件であるカテゴリーを導入すると esthétique 概念が意味的に分裂するのか、という点に関して示唆的である。ドゥルーズはカント的「感性論」を経験の可能的形式に関する理論と考えている。言い換えれば「感性論」とは可能的な経験の条件としてのカテゴリーと対応し、それと共同する感性という経験の形式に関する理論だということになる。他方で「美学」は、可能的な経験ではなく現実の経験を反映する芸術作品を扱うとされている。言い換えれば、一般的な概念によって基礎付けられるような可能的な、あるいは可能化されたような経験に対して、概念によって把捉し得ない領域を担保するのが芸術作品の効用であり、それを扱うのが「美学」ということになる。可能的な経験の形式に関する「感性論」に対して、経験の現実性を補完する「美学」、という対比が行われていると考えられる。つまり、「感

性論」が一般性を帯びたカテゴリーによって経験を基礎付けることに貢献する一方で、現実性の領域を担保するものとして「美学」が準備されている、というのがドゥルーズの考えるカントにおける *esthétique* の分裂の内実である。カテゴリーを導入し、*esthétique* を経験の可能的な形式に関する「感性論」として規定するカント哲学が、その一方で可能的な枠組みを越えた現実的なものの領域を「美学」として規定するに至るとすれば、*esthétique* の分裂の原因をカテゴリーだと考えることは可能だろう。

さて、この分裂を解消するためには「可能的な経験の条件」が「現実的な経験の条件」にならなければならないとされる。これは、経験の条件が可能的であったが故に、現実性を担保する「美学」が「感性論」と別箇に立てられたという *esthétique* の分裂に対するドゥルーズの見立てから考えるならば、経験の条件を扱う「感性論」の段階で現実性を担保させることによって、分裂を解消するという主張だと考えられるだろうか。経験の可能性を扱う「感性論」と、経験の現実性を担保する「美学」との総合は、現実的に経験を基礎付ける理論を打ち立てることによってなされる。では現実的な経験の条件とはどのようなものか。

条件付けられたものより広い範囲には及ばないそれら基礎概念が、(…)
esthétique の2つの部分、つまり経験の諸形式に関する理論と、実験としての芸術作品に関する理論とを再びひとつにまとめるのだ。(10) (11)

「条件付けられたものより広」くはない基礎概念が、分裂した *esthétique* を再統合するという文章である。可能的な経験の条件とは、現実的なものに対して一般的である概念のことを指していることは既に確認した。そうであれば、逆に上の引用の「条件付けられたものより広い範囲に及ばない」概念、がその反対概念としての「現実的な経験の条件」に対応すると考えられるだろう。ドゥルーズは1956年に書かれた「ベルクソンにおける差異の概念」というテキストにおいて、すでに「可能的な経験の条件」と「現実的な経験の条件」の対比を行っているが、そこで問題になっているのは一方では抽象的な一般観念への批判であり、他方では個別具体的なものにのみ妥当する概念を考案するという主張であった⁽¹²⁾。現実的な経験の条件とは、一般観念と対

照的な、個別の事物にそのまま妥当するような概念だということになる。そうであれば、これまでドゥルーズが主張していた「可能的な経験の条件」が「現実的な経験の条件」になること、とは以上のような、一般観念に対して、個別具体的な概念の考案することを意味していると考えられるだろう。この個別具体的な概念は、ドゥルーズ哲学における感性に独自の対象としての「感覚されることしかできないもの」を一般化ないし悟性化することなしに捉えるだろう。

議論を整理しよう。『差異と反復』においてドゥルーズは、カントの認識論がカテゴリーを導入することによって *esthétique* を、カテゴリーと共同して可能的に経験を基礎付ける「感性論」と、それとは別に経験の現実性を担保する「美学」とに区別したのだと主張する。この「感性論」においては、可能的に経験を基礎付けることを目的としている以上、一般的な概念に妥当するものだけが対象となる。これに対してドゥルーズは、「可能的な経験の条件」としてのカテゴリーに換わる「現実的な経験の条件」を導入することによって、分裂した *esthétique* という語の2つの意味が再統合されると考える。さて、「現実的な経験の条件」として考えられているのは一般観念に換わる、個別具体的な事物にそのまま妥当する概念である。なぜこれを導入する場合、*esthétique* の2つの意味が統合されるのか。消極的な回答としては、可能性の「感性論」に現実性を補完する「美学」は、「感性論」が現実性の領域をカバーするのであれば必要なくなる、という仕方で、両者の意味が統合されるのだと解釈することができるかもしれない。だがそれは「感性論」と「美学」という異なる意味の統合というよりは、「感性論」への「美学」の吸収と表現されるべき事態である。ドゥルーズはより積極的に、自身の *esthétique* 概念における「美学」的側面に関して、その中での芸術作品の作用に言及しながら示している。二度目になるが引用する。

esthétique の2つの意味は混じり合い、感覚され得るものの存在が芸術作品の内
に開示され、同時に芸術作品が実験として現われるようになる。⁽¹³⁾

ドゥルーズの提示する「感性論」が「感覚されることしかできないもの」を対象としていることは既に確認した。ここでは、2つの異なる意味が混じり合った場合に、「感

覚され得るものの存在が芸術作品の内に開示され」る、とされている。註6の引用のなかでは「感覚されることしかできないもの」は「感覚され得るものの存在そのもの」ともパラフレーズされているため、両者には互換性がある。つまりドゥルーズは自身の esthétique 概念において、「感覚されることしかできないもの」は「芸術作品の内に開示」される、と主張している。既に確認したように、「感覚されることしかできないもの」は、可能的な経験の条件としてのカント的カテゴリーによって条件付けられる一般性を帯びた経験の枠組みを超えたものと規定されており、それが開示される場としての「芸術作品」は実験的な性質を帯びる。「現実的な経験の条件」は一般化ないし悟性化し得ない感性に独自の対象を捉える個別具体的な概念であるが、この感性の対象が与えられる具体的局面としてドゥルーズは実験としての「芸術作品」を指定するのである。ここに、esthétique 概念の「感性論」に還元し得ない「美学」的側面の積極性が見出される。ドゥルーズの esthétique 概念とは、カテゴリーに換えて個別具体的な一対象のみに妥当する概念を導入することを介して、芸術作品の内に「感覚されることしかできないもの」、感性に独自の対象を見出す「感性論」かつ「美学」である。

3. 結

われわれは以下のことを確認した。①まず、それはカント哲学において「感性論」と「美学」という、本来は eshtétique という語に含意されていた2つの部分が別箇に立てられてしまったことを批判するものであった。②そして、ドゥルーズはその原因を「可能的な経験の条件」としてのカテゴリー、一般性を帯びた悟性概念に見出した。③カテゴリーの導入によって、カントにおける esthétique 概念は、経験に関してその可能性を論ずる「感性論」と、経験についての現実性を担保する「美学」とに分裂するに至ったとドゥルーズは考えた。④一方でドゥルーズは自身の哲学において、カテゴリーに換えて「現実的な経験の条件」としての、個別具体的な一対象のみに妥当する概念を導入した。⑤この帰結として、可能性の「感性論」と現実性の「美学」という、esthétique 概念の2つの部分への分裂は回避され、「感性論」の対象である

「感覚されることしかできないもの」が「芸術作品の内に開示」されるという仕方、esthétique の2つの意味が再統合されるに至った。

本稿では、前期ドゥルーズ哲学における esthétique 概念に関して、ドゥルーズのカント哲学批判を踏まえつつ論じてきたが、最後に以上のような esthétique 概念がドゥルーズ自身の哲学の内でのどのような位置付けにあるのか、概観する。『差異と反復』における esthétique 概念は、「超越論的経験論」というドゥルーズ独自の構想の内に位置付けられる。「超越論的経験論」とは、一般性を帯びた条件によって経験を条件付けるカント哲学に抗して、逆に「基礎付けること」が「変容させること」であるような条件によって、経験を基礎付けかつ変容させ、逆に今度は変容した経験によって条件の側が変容を被るようにする、という新しい超越論哲学の試みだと言える⁽¹⁴⁾。このなかで「感覚されることしかできないもの」は「出会いの対象」「シーニュ」といった語に置き換えられ、われわれの一般的な経験の枠組みを突き崩すような存在として語られる。「感覚されることしかできないもの」は「芸術作品の内に開示」されるということは既に確認したが、そうであれば前期ドゥルーズ哲学における芸術作品の機能とは、通常経験の枠組みを突き崩すようなものを提供することにあると言えるだろう。本稿では、ドゥルーズの「超越論的経験論」と前期の esthétique 概念との関係については上記のような概観を呈することしかできないが、ドゥルーズ美学思想における、前期ドゥルーズの esthétique 概念の真価を検討するのであれば、両者の関係をより仔細に論じなければならないだろう。これは今後の課題となる。

註

- (1) 生前では邦訳もある Buyden、昨今では Sauvagnargues や Grosz といった論者の他にも、様々なドゥルーズ美学研究が著されている。
- (2) 『差異と反復』 *Différence et Répétition*, puf, 1968 (以下 DR) の中で、明確に *esthétique* の両義性にドゥルーズが意識的であるのは pp. 79-80, 93-94, 130, 360 の計 4 箇所である。
- (3) カント『純粋理性批判』KrV, A19-21
- (4) DR, 93-94
- (5) 『カントの批判哲学』 *La philosophie critique de Kant*, puf, 1963 (以下 PCK), 15, 24 ドゥルーズは表象を、「自己呈示するものの総合」と定義している。これは感性を触発する「自己呈示するもの」=現象に対して、認識における能動性としての構想力、悟性、理性が適用され表象を形成することを表わしている。つまり、現象を主体の能動性の側で再び提示し直すこと（再現前）、がドゥルーズの理解するカント的表象作用である。
- (6) DR, 94
- (7) DR, 79-80
- (8) DR, 174, 183 ドゥルーズは感性と悟性が一致して表象を形成することを、「共通感覚」と呼び、これをカント哲学の特徴と考えている。
- (9) 『意味の論理学』 *Logique du Sens*, minunit, 1969, 300
- (10) DR, 364
- (11) ドゥルーズは分裂した *esthétique* の再統合を語る際 *rejoindre* ないし *reunir* といった動詞を用いている。これらの動詞は再統合、再結合といった意味合いで用いられていると推測され、確かにカント以前にはバウムガルテンが *aesthetica* を多義的に用いている。では、ドゥルーズは（バウムガルテンにおいて）元は一つだった *esthétique* がカントにおいて分裂したと指摘し、これを再び一つにしようとしている、と考え得るだろうか。だがドゥルーズがバウムガルテンの名に言及することはなく、仮に該当するカントの議論がバウムガルテンを名指ししていようとも、*re* という接頭辞の動詞を用いるドゥルーズの意図に関して判明に理解することは難しい。ドゥルーズによる *esthétique* の分裂の解消とは、カントを批判しバウムガルテン的な用語法に回帰することを意味していると考えてよいのか。例えば Leyla Haferkamp はドゥルーズの *esthétique* 概念の再統合に関する議論（本稿註 6 の引用テキスト）を参照し、そこにバウムガルテンとドゥルーズとの可能な接点を探っている（*Analogon Rationis: Baumgarten, Deleuze and the "Becoming girl" of philosophy*, *Deleuze and Guattari studies*, vol. 4, 2010, pp. 62-69 を参照）。だがドゥルーズが仮に *esthétique* の分裂の解消を「再」統合と語ったとしても、それはバウムガルテンとは異なる試みである。バウムガルテンの背景には感性を不明瞭な悟性として解するライプニッツ = ヴォルフ学派の影響がある

前期ドゥルーズ哲学における *esthétique* 概念について

が、ドゥルーズは批判的にではあれ、あくまでカント哲学を継承し、感性は悟性を別箇の能力として考えている。ドゥルーズはカント哲学の独創的な点として、感性や悟性といった諸能力の間の本性的な差異、という観点を重視しており、そのカント哲学を批判的に継承するドゥルーズもまた、感性と悟性とを地続きに考えるライプニッツ＝ヴォルフ学派の能力論に与するとは考えにくい。

(12) 『無人島 1953-1968』 *L'île Déserte et autre textes* (1953-1974), minuit, 2002 (以下 ID) , 49-50 ならびに Bergson 『思想と動くもの』 *La pensée et le mouvant*, puf, 1969, p. 108 を参照。ある対象のみに妥当する概念を考案することをベルクソンは「真の経験論」 *un empirisme vrai* と呼んでおり、ドゥルーズはこれを「高次の経験論」 *un empirisme supérieur* として再定式化している。

(13) DR, 94

(14) 鹿野裕嗣「ドゥルーズの『意味の論理学』の注釈と研究——出来事、運命愛、そして永久革命」(博士論文、早稲田大学) p. 79